

218
1877

不
物
能
通
上



211-487

天
新
維
畫



43. 2. 12
丙寅

夏目漱石序
 言談子評釋
 河東魁梧相句
 中都不朽曲



不折俳畫 上卷 目次

一漱石序 (俳畫論)

春

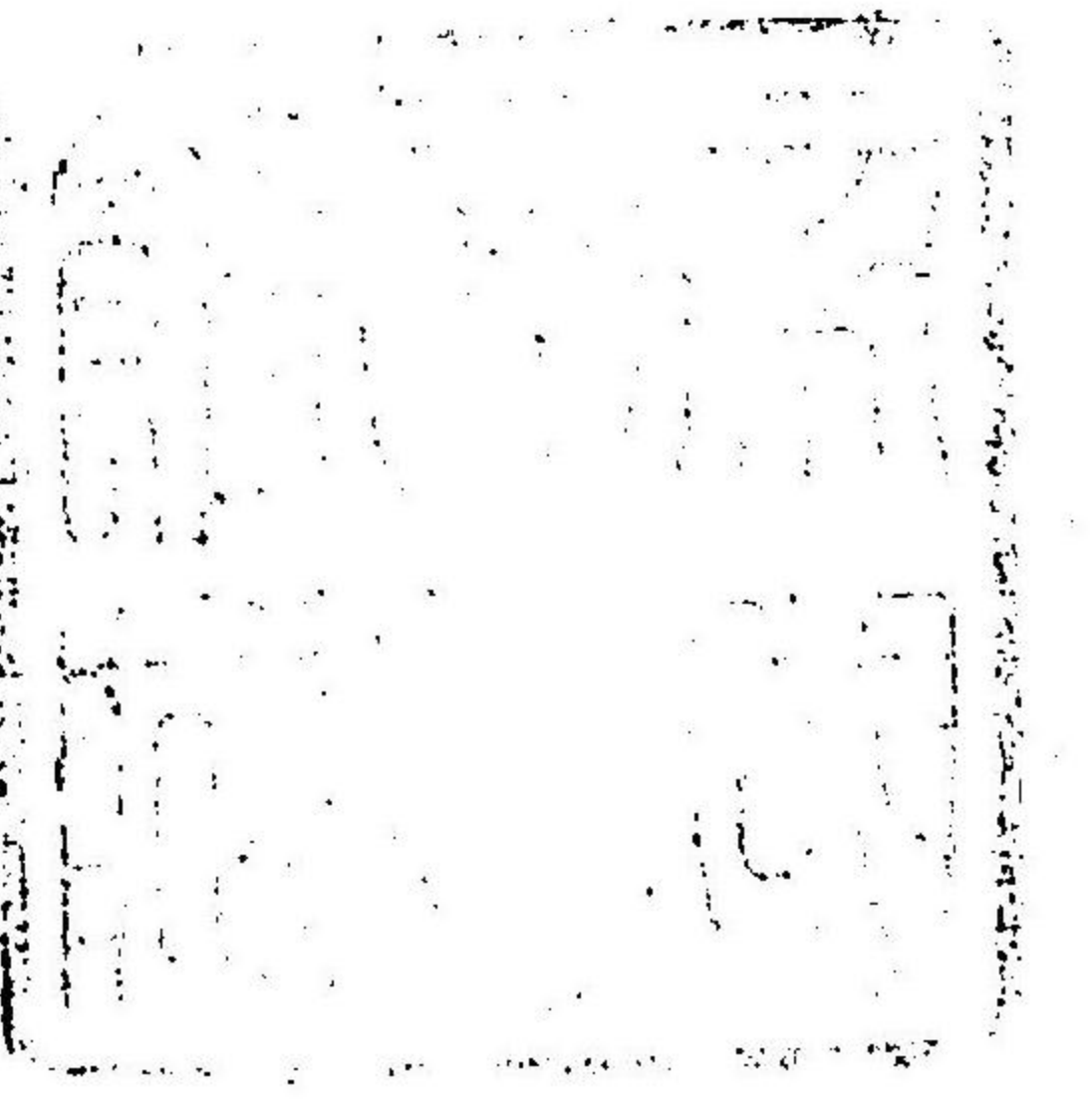
托鉢僧 熊の來て牛闘ひし霞哉
 旅人 朝寐する異な旅人や温む水
 狐 雄鼠にかゝりしな狐食みにけん
 僧圓空 春雨や何彫る君の不逞轉
 山路 椿谷蛇の池ありて山路な
 隣の梅 水買うて分つ蛭や隣同士
 園基 春の雪寸積むといふ下
 夫婦 ことばは夫婦して参りたり宵の春
 東京見物 馬酔木咲く奈良に展るや花巡り
 蘇武 屯田の武備解く頃や踏る雁

夏

漁夫 明日波る湖の眺めや堤納涼
 清水 鯉岩残りて清水なかりけり
 山伏 官命に伐る檜山あり雲の峰
 胃險 噴火後の温泉に住む家や閉古鳥
 避暑の宿 演説をして瓜夏ふ避暑の宿
 小瀑 大原なる山邊の瀧や殿作り
 虫干 虫干の寺に掃苔の供養かな
 目高 河骨の咲くや年々蓮のなき
 若冲 塵にありて風飄々の夏衣
 漢畫 馬車行くも城の敵下ろす夏野かな

以上二十句藝梧桐作

一虚子評釋



継のあて
牛たてんし
五五九





75

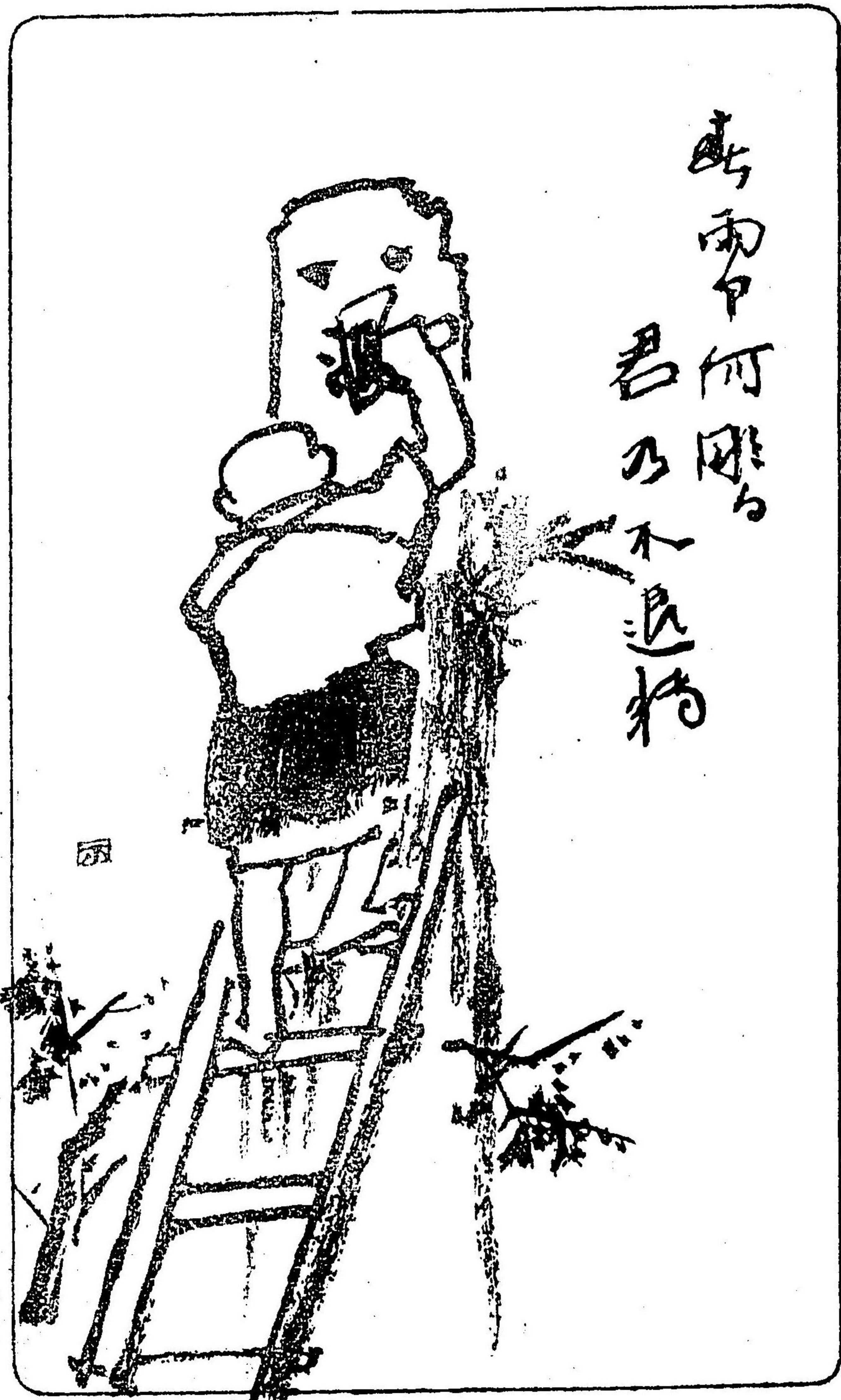
朝霧言ひ去
旅人やめる水

11

種
民
の
か
し
を
狐
は
ま
け



上
三



雨中何處
君乃不
退物

つばき谷
蛇の池ありて
山あり



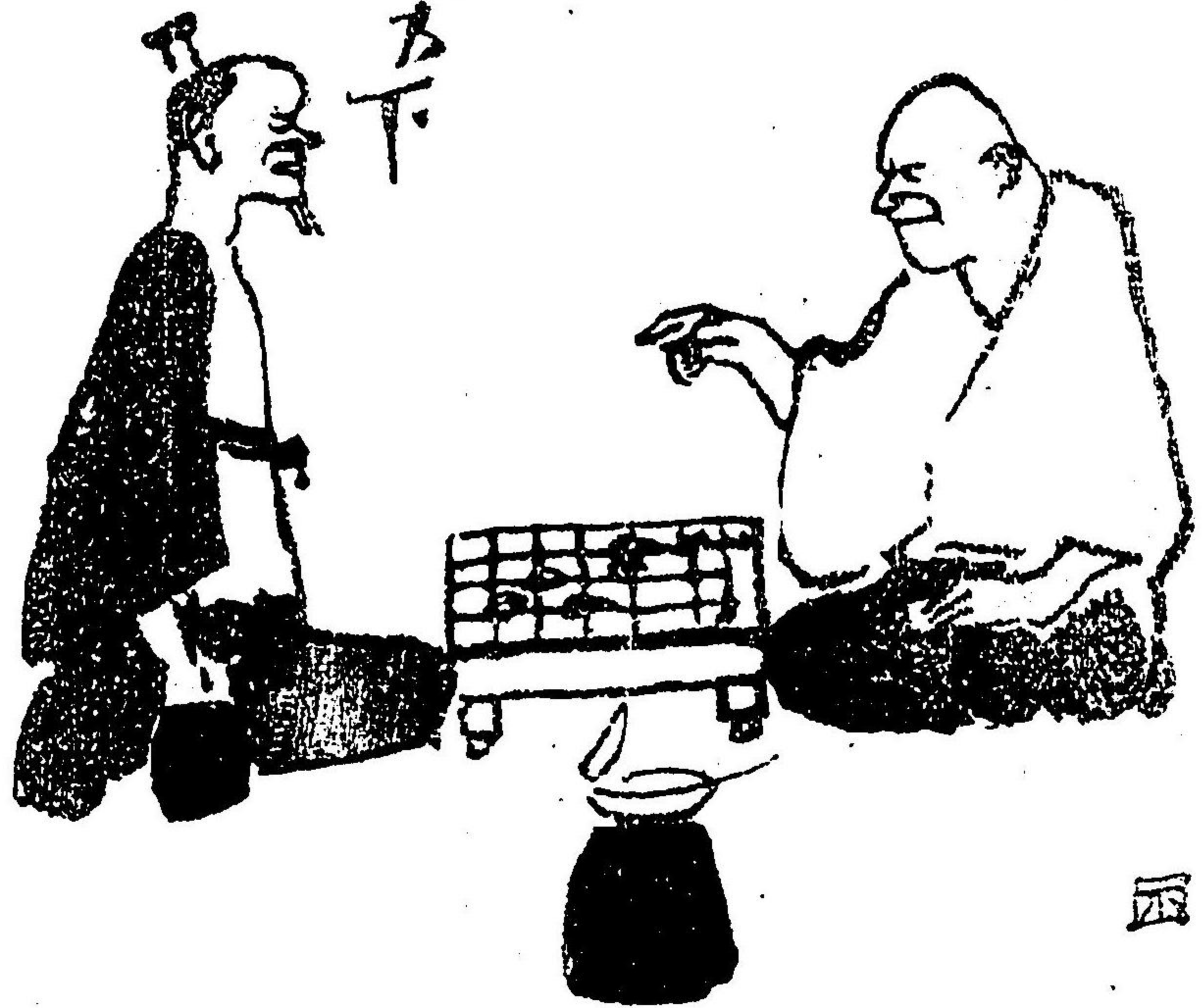
76

上五



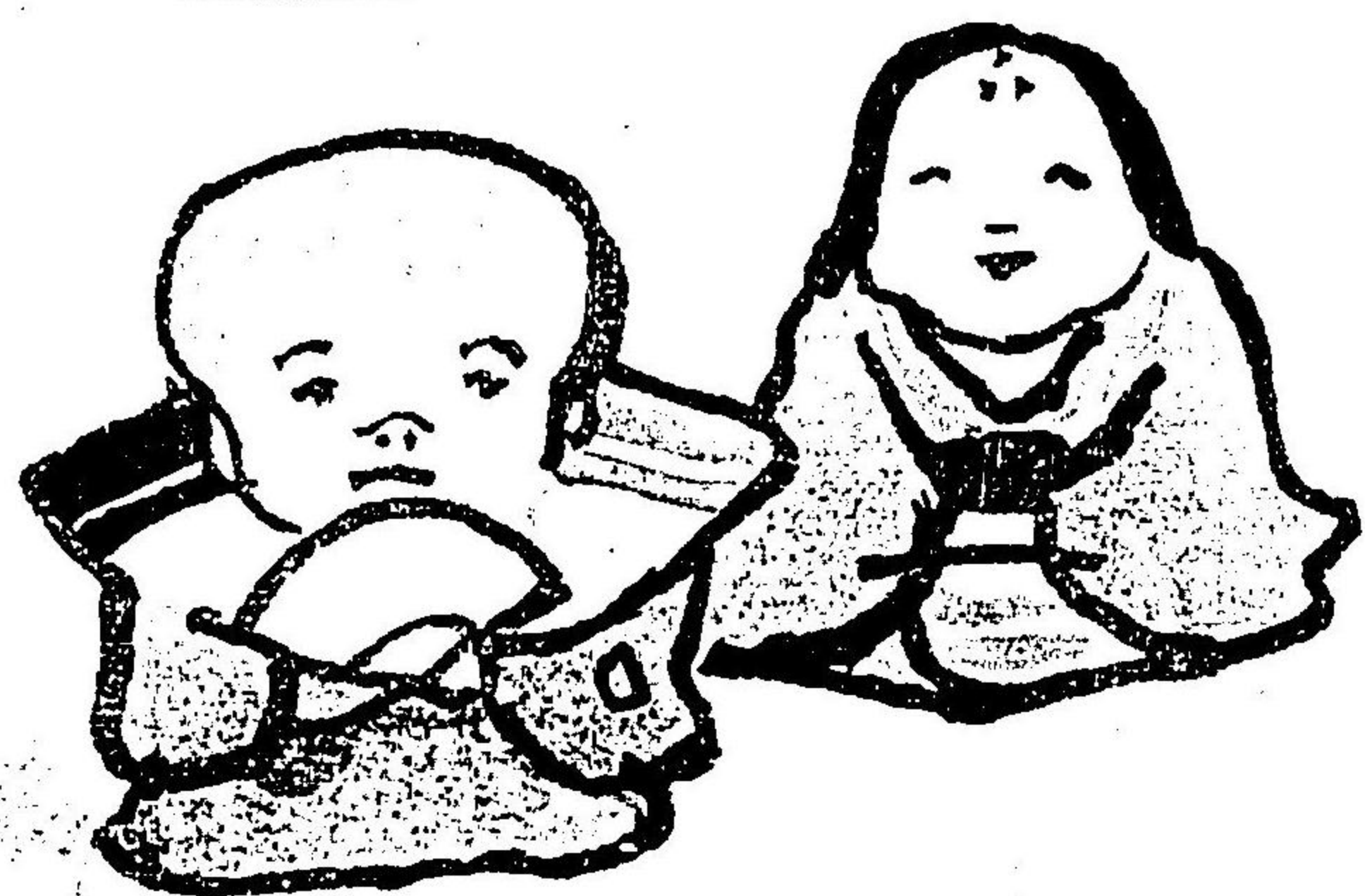


私の座寸積と
よや燗乃下





こころいふ夫婦
まのりたり骨乃妻





高木さく春見
まじやちま

毛田乃武備解
頃也畝苗雁



明日
湖
水
乃
東
也

端
納
凍
辰





劍岩
清水
にり
にり



五十二



夜鳥
橋山あり
その海



噴火及乃温あま佳む
家やかゝる未とり



演說
避暑乃也



大原山辺
春の景







車馬遊久
茂志魯乃
見於呂源
夏野可南



臨漢城梁祠石画

明治四十二年一月

木村山人書



評釋

金子

余は暫く俳句に遠ざかつてゐる。俳句に關する仕事には成るべく携らぬやうに力めてゐる。今此俳畫集の評釋といふものを遺る事も實は友人として不折氏の懇囑に負く事が出来ぬ爲めである。今日の余が斯の如き事を爲して此俳畫集に何の加ふる處があるかを自ら怪みつゝ筆を採る。

熊の來て牛闘ひし霞哉

碧梧桐氏が近來主張する俳句に余は没交渉である。なる可く句に

は深入りをせぬ積りであるけれども俳畫の解釋を試みん爲めには勢ひ先づ俳句の意を探ぐり置く必要がある。故になるべく淺き程度に於て句解を試むる。

此句は熊が牛と戦つたといふ奇なる事實に主として興味を持つたものと思はれる。山裾などに放牧された牛であるか、田畑に耕耘しつゝあつた牛か、又熊は百姓家迄来て牛小屋に在りし牛が之と戦つたのか、其邊は不明である。「來て」といふ言葉から推すと村迄では無くとも少くとも村近く來たのである如く想像さるゝが、併し其にしても明瞭では無い。終五字の「霞哉」から廣々とした田畑などを想像せられぬ事も無いが、此句は第一さういふ景色を咏じたものか、さういふ事實があつたさうだといふ噂を語り傳へ言ひ傳

ふるやうな意味なのか、其點が不明である。前者の場合ならば霞は兩獸格闘を包む景となる。後者ならば霞は季の感じを與へ且つ悠揚なる一種の趣きを添ふ方が主となる。

其處で不折氏は句の意味を寧ろ前者に解し其餘意として(即ち一轉化を試みて)後者の方を取り畫に之を現はしたものらしい。不折氏は句を得て之に畫を配する時分繙譯になる事は最も忌み嫌ふやうである。若し句の意味を後者と解したならば畫は句の繙譯となる。是れ不折氏の取らざる所である。其人物を僧と百姓とした事は穩かではあるが新らしいとは覺えぬ。

朝寐するいな旅人やぬるむ水

旅人は普通に朝早く起き急かしく旅宿を立出づるものであるが、これは異なる旅人で朝寐をもするといふのである。朝寐をする事が異なる旅人を性質づける全部では無く、元來異なる旅人なので、其行為の一つとして朝寐をもするのであらう。「水ぬるむ」は前句の後解に於ける「霞」と等しく、嚴密なる點景物といふでは無く、「水ぬるむ」といふ感じと斯る旅人との感じに調和を覺える點が主要なる配合の理由であらう。——固より川や沼の連想がある事は無論ではあるが。

畫は斯る旅人の旅中の一動作を描いたもので碑文に眺め入りたるは朝寐と異に異なる旅人を性質づける他の一事とも見る事が出来る。

雉毘にかゝりしを狐はみにけん

此句の意味は毘の傍に雉の毛など残りありて毘を取り亂されたるは、毘に雉がかゝつたには相違無いが狐にでも食はれたのであらう、といふのである。主觀的に敘して客觀の光景をも臆氣に想像せしむる處が面白味であらう。

畫が洋装せる狐の雉の羽をかざせる處にしたのは思ひ切つた變化である。畫だけ見ては何の事だか判らぬが、之に句を添へて見て畫家が之を轉化させた智識の働きの上に興味を覺える事が出来る。

春雨や何彫る君の不退轉

精進勇猛して懸命に彫りつゝあるは何物かと尋ねたる意なり。「春雨」は例の季の感じを興ふるが主にて兼て其強弱の變化もなく單調に靜に降りつゝあるが不退轉にもものを彫りつゝあると調和するのであらう。

不折氏は此句より僧圓空の事を連想して此畫を爲したのであるさうな。

僧圓空、美濃國竹ヶ鼻といふ所にて生る。幼より出家して某寺にありしが廿三歳の頃遁れ出て富士山に籠り又加賀の白山に籠る。或夜白山權現の示現ありて美濃國池尻彌勒寺再建の事仰せたまふよしにて至りしが幾程なく成就しければ其處にも止まらず、飛驒國袈裟山千光寺といへるに遊ぶ。圓空持てるものは鉋

一丁のみ。常に之を以て佛像を刻む。袈裟山に立ながらの枯木をもて作れる仁王あり。今これを見るに佛作の如しとかや。云々。

椿谷蛇の池ありて山路哉

此は句も解釋の必要が無く、畫も其儘の翻譯であつて解釋の必要が無い。翻譯嫌ひの不折氏が翻譯を敢てしたのは句が全部紋景であつて其儘畫にする上に興味があつた爲めであらう。「雉良」の畫の其句と相俟つて單に智識の興味を感じるよりも此畫の獨立したる畫として趣味の多い方が翻譯であつても寧ろ余は面白いと思ふ。

又俳畫といふものは多く人物が主であるに此畫の純粹の景色なのも珍らしい。

水買って分つ蜆や隣同志

此句の意余には判らず。或は飲料水を買ふやうな町方住居をするものが、どうかした場合に蜆を手に入れて其蜆を隣に分つといふのであらうか。即ち斯る町方住居のものゝ生活状態の一端を描いたものとても解すれば解するのである。尤も特に蜆を生かすに適した水とでもいふものあらば其特別な水を買ふ事にも解する事が出来やうが其は聞かぬ事である。

畫は斯る事實は親同志とし、其子供と隣の猫とは斯んな事をしてゐるであらうと想像して書いたのである。淺薄なる智識の連想にて余は敬服せず。

春の雪寸積といふや燭の下

句も陳腐なる趣向であるが感じはよい。畫も構想の上に何の苦心も無く——何の窮するところも無く——僧と武士との圍碁を描いたる處是亦陳腐乍ら面白い。句は戶外の景色を描きたる許りで無く、いふや燭の下」と室内の人を主格としてある爲め此畫も亦た翻譯といへばいへるが「春の雪寸積」とある外景が少しも描いて無い爲め其翻譯

譯といふ感じを薄めて居る。

こたびは夫婦して参りたり宵の春

以前は細君一人で参詣したが今度は夫婦して参詣したといふのであらう。

晝は此夫婦といふのに一頓挫を與へて其を福助とおかめにしたる處が俳諧手段にて面白し。

馬酔木咲く奈良にもごるや花めぐり

初め奈良に遊び其より大和路の花を探ぐつて又奈良に戻つた、奈良では馬酔木が盛りだといふのである。花に慣れた目に花酔木は殊に目立つて、以前も目についた花酔木の其奈良に歸つて來た時又目につく心地がよく現はれてゐる。

晝は其大和路を東京にして上野淺草の花人を描いたのである。斯ういふ轉化も面白いと思ふ。「蜆分つ」は洒落に落ち此方は其譏が無し。

屯田の武備解頌や歸る雁

句の意は解する迄もなし。晝は屯田の武備を一轉化して蘇武の故

事とした點「不退轉」の句同工である。

明日わたる湖の眺めや端納涼

此句の意も明白である。畫も直ちに句意を取り其眼中の一景物としての漁夫親子を描いた點である。「春の雪」と同工で無造作な處がよい。

劍岩残りて清水なかりけり

古き記事などには劍岩の麓に某の清水といふのがあると必ず記録

してある、其劍岩だけは今も残つてゐるが清水はもう跡方も無いといふのである。

畫は「清水」といふ二文字だけを取り出し、これより狂言の「清水」を連想したものらしい。斯る變化の仕様は連句などにもある。一體不折氏の句を畫にする變化の具合は連句の其の如く自由である。此縦横なところは氏特得の境地であるが此畫の如き變化は偶々一位あつてよく、數あるべきものとは考へられぬ。尙此畫は狂言を描いたものとしては頗る實地に暗い畫で、態度といひ表情の具合といひ寧ろ芝居に近い。余は見て厭やな感じがする。

官命にきる檜山あり雲の峰

官命に伐る檜山といふのは伐採しつゝある官林をいふにや、伐採しつゝある官林なら態々官命に伐るといふのはをかしいと思ふ。寧ろ私有林を特別の官命によつて伐採しつゝあるものと解する方が至當であらう。其は兎まれ木曾とか飛驒とかの深山の檜山を伐りつゝある——殊に官命にて大仕掛けに伐りつゝある——ところに雲の峰を配したる大景である。但し珍らしい句とは覚えぬ。畫は其深山といふ連想より峰入を想像して山伏を描いたのである。峰入は春若くは秋であるのを夏の句の場合に用ゐたのは理屈を離れて畫と句とは別々の處を行つたものであらう。働いた着想とも思へぬが季の相違を不都合と考へる程に不調和な感じも起こらぬ。

噴火後の温泉に住む家や閑古鳥

噴火後の火山の麓に在る温泉といふべきを省略して「噴火後の温泉」と言つたのであらう。「温泉に住む」とは温泉を便りとして生活してゐる家で温泉宿でも他の商賣をする家でもよからう。唯句全體から——殊に下五に閑古鳥とある處——から繁華な温泉町でないことは明白で、磬梯の諸處に散在してゐる温泉などが連想される。畫は「噴火後」といふ文字に重きを置いて其噴火後の光景を見に登山する人々を描いた。尤此人等の一夜の旅宿が其温泉に住む家であるか否かは讀者が連想の自由に任せてよからう。

演説をして瓜もらふ避暑のやど

避暑をして居ると其村の人々に演説を頼まれて終に一席辯じた。ところが其返禮に村人から瓜を貰つたといふのである。畫は其避暑の宿に在る老政客らしきものを描いた。唯其だけの事である。演説をしてゐるところでも無く瓜を貰つた場合でも無く唯適意優遊してゐるところを描いたのである。

大原なる山邊の瀧や殿作り

大原の山邊に瀧がかゝつて居る、其瀧を眺めにして何某殿の邸が

作られてあるといふのである。

畫も先づ句意其儘のものとするべきである。唯余が句より想像した瀧と家との位置が畫では反對になつてゐるところが面白い。

虫干の寺に掃苔の供養哉

「掃苔」は墓參をして墓の苔を掃ふこと、其の墓參をも供養といふのであらうか。「供養」とは普通に殿堂を飾つたり、讀經をしたり、食物を供へたりすることをいふのであるが、此に「掃苔の供養」といふ文句に逢着して余は一寸まごついた。先づ普通の墓參の事と解釋すれば句意は極めて單純で、墓參をした日寺では虫干をしてゐた

といふのに過ぎぬ。

畫は寺参りの人の虫干の畫幅の前に在る様を描いたのである。此畫中の人物が作善の人といふわけでもあるまい。即ち畫は「虫干の寺」だけより着想し、掃苔以下は問題にしなかつたのである。

河骨の咲くや年々蓮の無き

河骨は年々に咲き廣がつて蓮は段々に減つて行くといふのである。「蓮の無き」とあるは「減る」といふより一步を進め年々減じてもう此頃は殆ど皆無とならんとする様が想像される。

畫は斯る池沼では斯んな事も絶えず行はれつゝあるのであらうと

悪太郎を點出したのである。

庵に在りて風飄々の夏衣

家外に在りては風の爲めに夏衣の吹き返へされるのは格別の事でも無いが家に在つて而も其夏衣の風にふくだみたる様を見る事はやがて其庵の涼風の中に立てる事、庵の主の瀟洒として風塵の外に在る事が想像される。

畫は其庵主を若冲と見立てたのである。圓空、蘇武など、共に斯る歴史的の見立ては氏の好む處と見える。

伊藤若冲。字は景和。斗米庵と號す。京師の人。初め狩野に學

び後ち元明の古蹟を模し又光琳の筆意を習ひ、轉じて一機軸を出す。山水花鳥人物をよくす。殊に鶏を畫くに妙なり。家鶏數頭を養ひ數々其形狀を熟視し、後ち揮毫す。故に筆意其眞に入る。偶鶏の畫を請求する人は米一斗を謝禮とすといふ。寛政十二年九月十日没す。

車馬行くも城の見下す夏野哉

盛んなる城下の趣で、郊外の夏野を車馬が行くのをも城は巍然として其を見下してゐるといふのである。不折氏之を得意の漢畫に見立て文字も之に應ずる様に洒落た。

前の蘇武の時も同様であつた。

漢武梁祠畫象は後漢の初の頃のものにて今山東省にあり。宋の頃悉皆埋没せしを近世黃小松といへる人苦心搜索して殆其全部を發掘せり。伏犧神農を初め重なる帝王より著名なる歴史の出來事、忠臣孝子刺客の故事及廟堂の儀式鹵薄行列の有様戰爭の狀況等より天上、地上の神靈界の有様迄緻密に畫き刻したるもの總て四十八石にて圖の數は一石多きは數十に至る。多くは隸書細字の題號あり。

以上繪畫の詳は主として素人に氣のつく着想の點許りであつた。其技術に至つては余には充分に判らぬ乍らも此前の「俳畫法」の時の畫に比して遙に圓熟の跡を認める事が出来るやうである。詳しく

は其道の人の批評に俟たねばならぬ。

不折俳畫上卷評釋 終

本書五絶の由來

昨春不折先生を訪ひし硯、俳畫の雅談簡古禪味饒なる清談を聴き、心動きしこと尠からざりし、よつて予が病後の閒ありしに乘じ、碧先生との合作を請ひ梨棗に鐫り、同好の士に贈りもし、又弘く發賣もしたりしが、先きの俳畫法なり、然るにこは小冊子なりしにも拘はらず、世間の歡迎淺からず、四版の増刷を要求せし程の始末にて、道樂半分の事業が却て黒人まかせの結果とはなれり。

俳畫法發行の當時、不折先生、これに續きて碧君の四季四十句を選び、四十幀の俳畫を試みんかと約せられしが、前集すでに斯の如くなれば、爾來神澄み興湧く毎に揮灑頗る勉めらる、然れども、予の訪ひて稿本を請ふ毎に「君既に營利を離れて公行す、予又商賣氣を離れて構思百端稿を更ふること何れも四五次に及べども未だ意に滿たず、畫稿は斯の如し」と笥を傾けて稿本を示さる、予之を見ては強て請はん術無く空しく歸るを常としたりき、されども予の病も全く癒え、氣旺んに腕鳴りて抑止

し難かりしかば、今春に及びて、又頻りに車を飛ばせて脱稿を乞へとも先生愈塗抹改稿の益すのみにていつ果つべしとも思はれず、ある日予又先生を訪ひ巧遅ならざれば俳の眞意に反くにや、先生の俳畫の何ぞ遅き、願くは予をして畫稿中に就て選び取ることを許されんことをといふ、先生哄然大笑君の攻撃亦俳味あり、されとも昨夜既に纏めたりとて一冊を取り出し與へらる。

予狂喜して尺璧もたゞならず直に辭して歸らんとすれば、先生止めていふ、漱虚二君に俳論及び評言を請ひおけり、往つて受けられよと、予益狂喜し履を倒にして歸りき。

稿本全く集るを見れば三先生の作物は既に天下の三絶也、予又尋常書估の後塵を追はず、彫刻印刷の雙絶を以て諸先生の好意に報ひざるを得ざるを知れり、即ち日々工人の家に臨み指揮監督して漸く茲に完成を告ぐ、讀者幸に本書の五絶の誇張ならざるを看取せられん事を希ふ。

明治四十三年三月

光華堂にて

中川知新識す

中村不折先生著及畫 河東碧梧先生俳句及書

第四版
俳畫法
和裝美本
木版奉書彩色刷
金七拾錢
郵税金四錢

口繪寫真版刷 雪舟。芭蕉。蕪村。古淵。
俳畫十二ヶ月彩色刷不折畫 俳句碧子の書

○俳畫とは？
無聲の詩と短詩との調和せし劇々高雅の美術品なり
○俳畫法とは？
本書を精讀せば俳人畫家は勿論誰人にも容易に描き得る妙法なり
○俳畫論とは？
不折先生の十數年前子規先生と研究し爾後研究と天才との秘訣を開放詳説し、崇高風雅の清榮を滿天下の雅君に公にす

本書は不折俳畫の前篇にして先生特得の俳畫十二葉及碧梧桐先生の筆になれる四季四十句を收め巻尾には俳畫論と題し畫風、畫法、題畫の實價運筆法等を親切に説明したれば俳畫の何ものなるかを知らんと欲する士は須らく一讀せざるべからざる良書にして一たび本書を繕けば妙味津々、風韻躍々として紙上に溢れ頗る興趣を感ぜしむ、斯道に遊ぶの士は必ず一本を備へざるべからざる珍書なり

好評噴々として忽ちにして絶版となり茲に第四版を發行す以て本書が如何に世に歡迎せられしかを知らむ

本書の下巻は秋冬二十題三月二十五日發行にして定價郵税は上巻と同じ

木版印刷 光華堂
活版印刷 東洋印刷株式會社

明治四十三年三月九日 印刷
明治四十三年三月十二日 發行

不折不許複製
不折不許
東京市下谷區中根原町卅一番地
著作者 中村不折
東京市本郷區向ヶ岡園生町三番地
發行者 堀昌次
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷者 中野鉄太郎

定價 金九拾錢
郵税 金八錢

發行所 東京市本郷區園生町二番地 光華堂
東京市本郷區向ヶ岡園生町三番地 堀昌次

賣捌所 東京市神田區 東京堂
表神保町三番地
東京市本町至誠堂 名古屋川瀬
大阪 吉岡・杉本 久留米菊竹

三月二十日 再版發行

故帝室技藝員橋本雅邦翁筆 (第三回増刷出来)

好評 噴々
雅邦帖
正價金參圓八
拾錢小包料内
地拾貳錢清内
臺灣參拾四錢

緞子表金線折本美術畫帖日本獨得美術
木版緻密極彩色雅邦紙印刷四季三十圖

- 次 目
- 喬松雙鶴 春晴岳雪 狙公操縱 池上鴛鴦
 - 麗禽啄花 上巳清樂 名媛推敲 山紫水明
 - 白沙青松 奇峯摩天 水邊鶴鳴 浮家泛宅
 - 山高塔小 詩聖觀瀑 少女嬉戲 猛虎藏爪
 - 海氣滿樓 風伯鳴枝 一竿忘機 水亭落雁
 - 紅葉村莊 田家秋成 吻々呼類 樹下老村
 - 氣溫花香 穰々有年 月下擣衣 孤客晚歸
 - 寒江蘆雁 雪滿群山

帖中收じる所の神品三十圖悉く是れ美神の權化彫刻は
老手獨得の技巧に成て神韻筆意は勿論傳色暈染真物に
異らず實に畫家笈中の秘冊紳士机上の愛玩なり

同 三月二十日 再版發行

默風前田先生書
心經
和裝大本白紙刷
正價各金六拾錢
郵稅各金四錢

楷書既刻發賣。隸書三月發行。
行書四月發行。草書五月發行。

右楷書ハ古寫經體ニ依テ揮毫セラレテ筆力勁健ニシテ利劍ノ如ク
實ニ楷法ノ模範タル之ニ過ケルモノ非ルベシ又隸書ハ泰山經石刻ニ依
テラレタル以テ字形飄逸筆勢温健ニシテ野鶴ノ如ク悟道ノ書ト謂フ
ベキ乎而シテ各書トモ毎字一寸二分ニシテ印刷鮮明裝釘雅麗ナル等普通
出版書ト同一視スベキモノニ非ズ御望ノ諸君ハ至急申込ルベシ

東京日々新聞批評 ○楷書心經。前田默風道人は現今書家中の傑
々たるものなり、其書道動にして簡古、清雅にして醇朴なる殆んど他に
匹敵を見ず、又道人の斯道に熱心にして、或は講話に或は著述に其普及
を圖らんとするは甚だ感ず可き次第と謂ふべし。而して今同刊行せし道
人の書帖は益老熟の域に進みし状を見る可く筆致の健剛中に一種の風韻
を帯びたるは最も賞するに足れり、殊に此書は古寫經體に依りたる邊き
なれど字形方正にして楷法の模範とす可く、隨て世の字體を觀るものと
同一視す可からざるなり。

報知新聞記者中山丙子先生選

再 版
大家名畫集

和裝美本美術木版緻密極彩色奉書紙印刷插畫
十九葉
定價貳圓五拾錢
郵稅金八錢

插畫目次

- 榮之 船遊
- 又兵衛 ありのすまび
- 紫梅 妻戀猫
- 雪舟 羅漢
- 華山 草花に猫
- 政演 天明年間吉原所見
- 應舉 京人形
- 春聲 色即虚空
- 杉風 若菜姿(俳畫、風畫句)
- 春草 茶店女
- 蕪村 泰山拾得
- 北齋 辰巳女
- 拙一 草花
- 信正 雙陸遊
- 寛齋 遊戯人物
- 長春 のるま人形(其一、其二)
- 清信 花見男
- 天正前後堺堺浦留地の圖

本書は本邦美術家を代表すべき大家中より特に傑出せ
しものを選び更に其精華を抜きしものにして殊に木版
の精巧、印刷の鮮明彩美なるに到つては他に其比を見
ず、巻尾には中山先生の流暢なる筆、趣味ある材料と
を以て各畫人の傳記逸話及奇行を蒐めて數十頁を附し
たれば畫面以外に感興躍如として紙上に溢る、思ひあ
らひ 初版忽ち賣切再版を發行す

德富蘇峰先生序 中村不折先生口繪
前田默風先生著(書及畫) 高森碎巖先生

書畫研究法

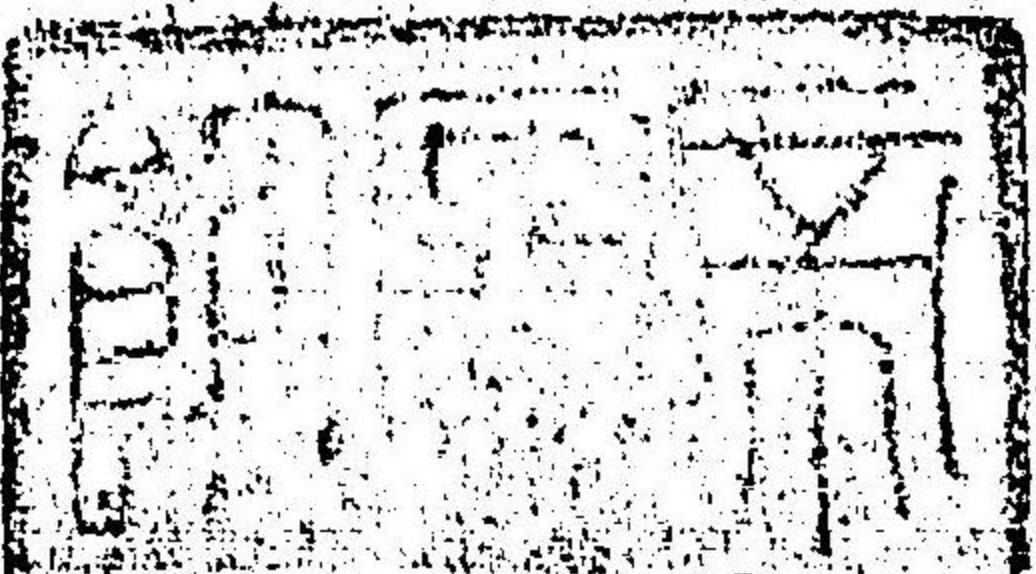
上卷挿繪圖 九十餘圖(繪畫點畫圖及線筆)

本書は默風先生が畢生の蘊蓄を傾倒したる書畫速成の
要訣を後進者の爲め世に出さんことを勸め茲に梓に上
せしものにして、店頭臚列する蕪雜の書と軌を同らせ
ず、一度本書を精けば多數の繪畫及點畫圖につき親切
丁寧に指導し殊に難解とする筆鋒、運用、秘事、秘傳
の一切を開放詳説したれば容易に運筆の妙を會得する
と同時に書畫の根本的原理の同一を了解し從て古人筆
蹟の眞偽を鑒別する技能を得べく實に三千年間書畫道
の要訣を茲に悉せり、書神手を執つて教へ畫聖紙に臨
て教ふる如し實に空前の一大珍書なり

213
1187

213
187

不
物
能
画
下



明治四十三年二月

不	河	疎	不
折	東	石	折
画	碧	厚	非
及	梧	高	画
書	相	濬	卷
光	非	虛	之
華	句	子	下
堂	中	評	頁
梓	村	釋	目



明治
43. 4. 6
内交

不折俳畫 下卷 目次

一 漱石題句及書

秋

大山城

權を棄せてひそかなる舟や三日の月

道祖神

案山子より豚狀屈きし田主かな

達磨

師を追うて霧晴るゝ大河波らばや

寺まゐり

露に來て繪天井見る小寺かな

轍

二本づゝ祭轍や波り鳥

あなめぐ

秋風や去勢せし馬といふを見る

河童

並松のハ々と伐られぬ秋の水

菊の村

桑を梨を焚め作るや菊の村

夜鷹蕎麥

新蕎麥や蕎麥なき盤も横はる

蘆雁

川口の塞がる冬も障りけり

一 虚子評釋

冬

膝栗毛

短日やまそはれ出でしかげ齒り

美人

杜鰯船にありて文來る誰よりぞ

影法師

手をかさせば睡魔の寝ふ火桶かな

渡船

霜風きに濃き紅葉見ゆ向ひ鳥

お給仕

留錫のお物好みや薬汁

山寺

納豆の甘きはあれど米わろき

雪解け

積菓の三つある庭や冬牡丹

香爐

日頃寄せぬ港が、りや鳴く千鳥

糸車

綿入の屑あて向も鄙びたり

子規居士

春待や宿禰に堪へて憂ふ事

以上二十句巻括桐作



案山子す許状
とす
田之八





伊達おろし

大川
見送る

三

雨のよ
来て
得天井
見よ

か
す
か



二本以象城也
戸ノ下



下五



秋風
中
見

25

14



笠松のハタヒ

きよらぬ
秋のうら

山莊子秋水篇 意 園

桑を
新戊

将大のつ
中

桑の
都





新舊
其
其
其

川口此山寺
冬七歳



菊



牡蛎所ありて
文集、誰より
乞





てんかたせ

睡魔乃

おとし

火桶先



411



むらい嶋

霜風よ濃き
紅き見ゆ

笛錫の
うまの
汁





納豆乃あまき
あれと米とろす

卍
十



日
馬
其
流
一
千
五
百

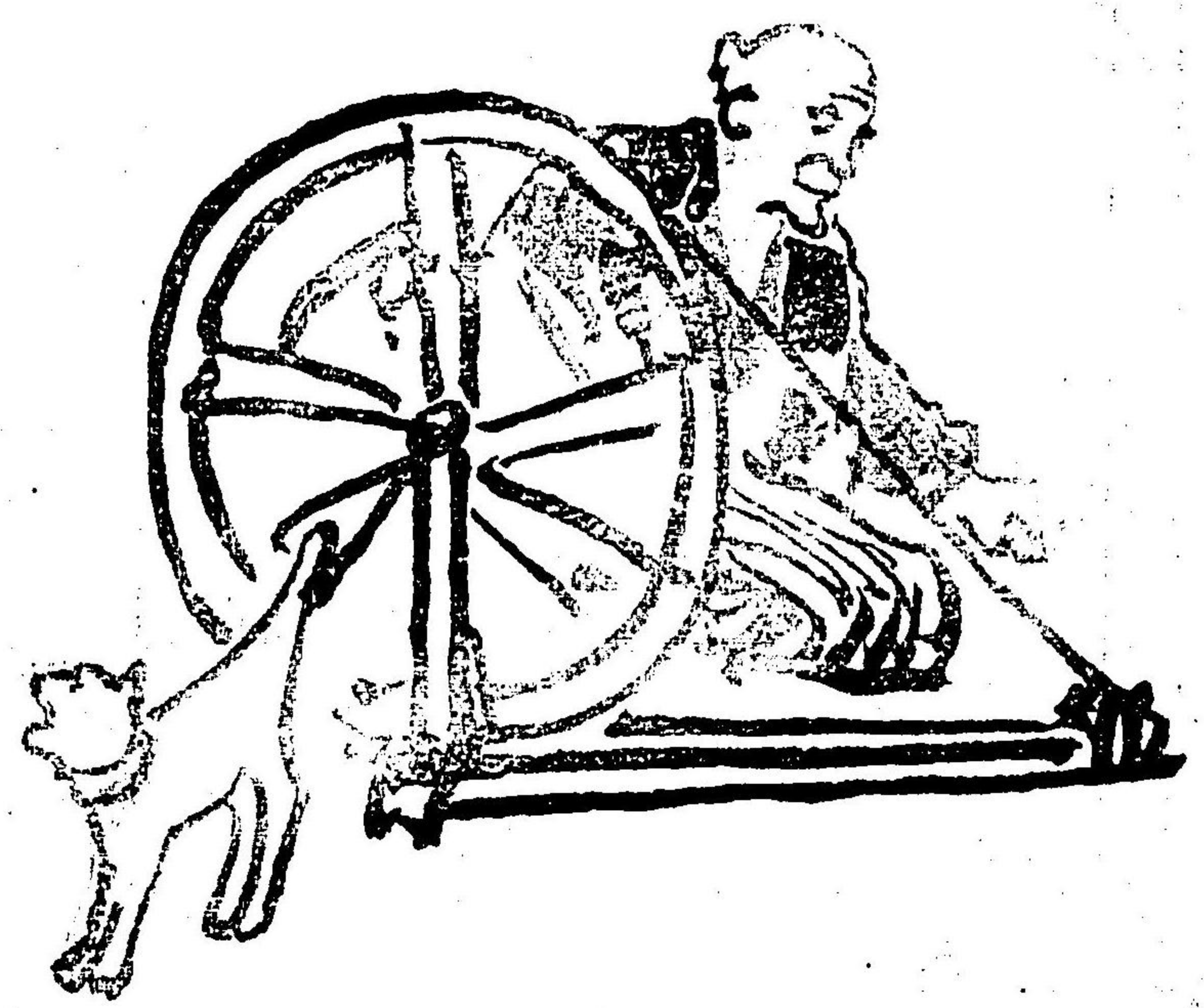


天

下

綿入此
骨ちり
ちり

印





春待
宿病
よて憂ふ事

明治四拾三年二月

永野山人書



評釋

金子

糧を乗せてひそかなる舟や三日の月

此句を一目見れば余り

星々一見之が二十八日

ひたるきは殊に軍の大事なり

孤屋
芭蕉

といふ連句を思ひ出した。敵に包圍されてゐる城などへ私に兵糧

を運ぶ船を絞したのである。唯三日の月とあるより夕刻の景色ならんと推定さるゝが、三日月のほのかな光りとひそかなる舟との感じの調和はあるとしても、星さへ見えぬ漆の如き闇夜の方實際に近い感じがする。

晝は不折氏の話に此句を一讀して何といふ譯も無く犬山城を連想するところから犬山城の實景を寫生した迄である。前景の小舟はたゞの舟で、句中に在る糧を乗せた舟では無いとの事であつた。

案山子より訴狀と、きし田主哉

此句の意味余には解することが出来ぬ、非人情の案山子を人間化

したところに作者の感興はあるのであらうが余には其興味すら想像することが出来ぬ。余は斯る句の背後には作者の熱情を要望する。而して此句には其が缺けてゐる事を不満に思ふ。

不折氏にも此句意は判らぬのださうで、唯訴狀といふ以上は不作であつたことが連想さるゝところから貧村を想像して描いたのだとの事であつた。道祖神に、疫拂ひの七五三竹、物貰ひ禁制の立札、其に「蝗とるべからず」といふ札迄立つてゐるところ貧村たるに相違無い。無造作に寫生帖の一面を抜き出して來たところに自然の趣がある。

師を追うて霧晴る、大河渡らばや

師に逢はうと某地より某地に追うて行つて見ると已に其地は今朝早く發足したとの事である。其ですぐ又其跡を追うて行くと、大きな大河に出食はした。折節日が漸く登つて、一面に罩めてゐた朝霧が晴れかゝつた。いで此河を渡らうといふ時の情景である。好句と言つてよい。

蘆に乗つて水を渡る達磨の連想から其を牛にしたところが不折畫伯得意の境地と想像さるゝ。碧梧桐氏の句は旅中自ら追はるゝ人となつた經驗などからの着想と考へらるゝが不折氏が之を達磨大師にしたのは例の歴史癖と言つてよい。

露に來て繪天井見る小寺かな

露の深い草原を分けて來て野中の小寺に參詣し其繪天井を見るといふ敘事である。大寺の繪天井は珍らしくも無いが小寺とある處に新らし味がある。繪天井を有する小寺は小寺乍らも由緒あるらしく、草深き野中の小寺に突として繪天井を點出し來たところに明瞭なる印象をとゞめる。

畫は此寺に參詣する人を足利時代の婦人としたのである。句中に在る參詣人が此婦人としてもよく、此寺に數ある古往今來の參詣人中にかゝる婦人のあつたといふだけでもよからうと思ふ。是等は極めて餘裕のある題畫法で面白いと思ふが、唯繪天井の極彩色

に婦人——殊に足利時代の婦人——の極彩色の服装を配合せしめた點は變化が足り無い。同じ足利時代の人物を配するにしても婦人で無い方がよかつたらう。

二本づゝ祭幟やわたり鳥

田舎の秋祭りの景色で、僕の國などよく見るところである。鎮守の森を彼方に見て一對の幟の野路を挟んではたくと風に翻つてゐるのは淋しいうちに勇ましいところのあるものである。其大空に多くの渡り鳥の渡りゐるは更に此景に大を加へたものである。此句の如きは銜氣少しも無く而も拔群の手腕を認めねばならぬ。

殊に着眼すべきは「づゝ」の二字に在る。此二字の爲め一對の幟は複數となつて見渡したる野良の其處此處に一對づゝの幟の立ちゐる様を想像する事が出来る。大空の渡り鳥の數多きと共に此幟も數の多いところが面白い。

畫は其複數の幟の而も一對のうちの唯一本を今推し立てつゝあるところを描いたのである。頭髮を描いた片方の頁に一本の毛根を大きくして見せたやうなところに興味がある。

秋風や去勢せし馬といふを見る

原句は「去勢せし馬といふ」とあるのが不折氏の書いた方には「去勢せ

しといふ馬と誤つてある。意味は別に解釋を要する程の事も無い。「去勢せし馬」から業平朝臣及觸髅小町を連想したいたづらであらう。例の歴史的のもので是亦別に評する程の事も無い。

並松のハタときられぬ秋の水

並松がハタと伐り倒されたといふだけの句である。秋の水は其並松添ひにあるのであらう。秋の水の中に伐り倒されたと解してもよい。

秋水に河童は二十年來のものである。子規居士が須磨に病んでゐた頃不折氏は十餘枚の俳畫を認めて送つた。其中に莊子の秋水篇

と河童との圖があつた。——これは其後ちホト、ギスの表畫として載せた事もあつた。——唯此畫は其河童が胡瓜に跨つてゐるのと、手にサーベルをかざしてゐるだけが變化である。秋水に劍などは古い洒落だがサーベルにしたところに多少諷刺の意味もあるのであらう。

桑を梨を獎め作るや菊の村

官からか若くは私人の團體などからか、兎に角農民一般に桑、梨等の栽培を獎めるといふのである。尤も其村は以前から農事が充分に發達してゐたといふので無く、菊などを多く作つて香氣に暮

してゐるものが多い、其に警鐘を叩いて覺醒を促すといふやうな心持があるのであらう。

畫は斯る村の婆さんを書いたといふ迄。但し此婆さんなどは餘り其警鐘に驚かさねぬ方の部に屬するのであらう。

新蕎麥や碁笥なき盤も横はる

田舎びた蕎麥屋などであらう。碁笥なき盤といふのが新しき見つけどころといふ迄。

畫は其蕎麥屋を描かず、其新蕎麥が表を歩く都の蕎麥屋の釜中に在るところを想像して其につきもの、按摩さんと犬とを點出した

のである。此蕎麥屋の荷は故實を檢べて書いたのだとの事。

川口の塞がる冬も隣りけり

もう冬が近くなつて川口が塞るといふのである。塞るといふのは舟の通行が絶えるのであらう。水が減ずる爲めか氷が張る爲めか其邊は判らぬ。

畫は冬近き川より蘆雁を想像し、古き日本畫らしくもの／＼しく落款したる所が思ひつきでめる。

短日やさそはれ出てしかげまねり

お蔭参りといふのは昔六十一年目毎に流行したとかいふ伊勢参官の事で、其時は皆無錢で出掛ける、地方の人々が身分に應じて攝待をするのださうな。但し大方時候は春らしい。此句は果して其の事を詠じたものかどうか。短日は短き冬の日人に誘はれて其お蔭参りに出たといふのである。

晝は伊勢参官より膝栗毛赤阪の段の連想。

牡蠣船にありて文來る誰よりぞ

下二

大阪の橋々の袂に在る牡蠣船に入つて二三人小酌を催してゐると、手紙を持つて來たものがある。牡蠣船は普通の料理屋などゝ違ひ、船が、りをしてゐるほんの小料理屋である。外觀から言つても橋の袂をだら／＼と下りて小さい板橋を渡つて客は船窓をくゞり入るといふやうな粗末な手輕な目立たないものである。其んな處にゐる客——自分——の許へ態々手紙をよこしたのはまあ誰からかと怪み興じたのである。

晝は「文來る誰よりぞ」といふ文句から艶に解して遊女とし、例の歴史癖から之を元祿の遊女としたのである。

手をかざせば睡魔の襲ふ火桶かな

下三

冬の夜寒威と戦ひつゝある間は睡くもならぬが一度火桶に手をかざすと忽ち睡くなるといふのである。火燧にあたつて睡くなるのは普通だが火桶に手をかざすだけで睡くなる處に如何に克己して寒氣と疲勞とに戦ひつゝ苦學しつゝあるかを想像せしむるに足る。畫は其人の影法師を描いたのである。自然であつて平凡で無い。業平や元祿の遊女などに比すると此の題畫は遙に群を抜いてゐる。

霜風に濃き紅葉見ゆ向ひ島

朝霜のしたゝか下りたやうな冬日和の日向ひ島に濃い色をした眞赤な紅葉が見ゆるといふのである。

畫は其紅葉を見る人を船中の人としたのである。二枚續きの片方の畫は濃き紅葉の見ゆる向島の遠景であらう。

留錫の御物好みやかぶら汁

留錫中の法主が珍味佳肴に飽き百姓などの食ふ燕汁こそ好ましかれと特に其を所望するといふのである。

畫は其燕汁を作りて進める給仕男を描いたのである。變化は無いが無理がなくていい。

納豆の甘きはあれど米わろき

句は解する迄もない。

畫も其を山寺と見て書いたといふ迄。これも着想の上に特に働きは認められないが畫は面白い。

積藁の三つある庭や冬牡丹

三處に積藁のある庭に冬牡丹があるといふだけの事。但し普通のものくしき庭に在る冬牡丹は珍しくもないが、これは農家の庭で其邊には積藁が三處もあるこちらには冬牡丹が咲いてゐる其處に興味を持つたものであらう。

畫は雪解けの汚なき水を掻き流しつゝある老人を描いたのである

さうな。普通雪解けは春季であるが冬牡丹の咲くやうな暖い庭には冬のうちにも雪の解ける日はある。

日ころ寄せぬ港が、りや鳴千鳥

平生は寄港せぬ港に特別の事情の下に寄港して舟が、りをした。千鳥の啼聲が聞えるといふのである。平生寄港せぬやうな港ならば勿論大きな港では無い。ほんの漁村位のものであらう。従て千鳥の啼聲の淋しい様も想像される。

畫は一寸判らなかつたが作者の説明を聞くと斯うであつた。千鳥といふところから千鳥の香爐を連想し、其から單に香爐を想像し

て其香爐を愛翫したる老人を描いたのである。此畫に在る香爐はたゞの香爐で千鳥の香爐では無いと。千鳥の香爐は古い洒落で、其千鳥の香爐を媒酌者にしてたゞの香爐を畫いて此句の題畫とするのはちと無理だ。

綿入の肩あてなほもひなびたり

綿入を着た田舎人を見た時の句で、其綿入も縞がらから何から一體に鄙びてゐる上に、其に肩當があるところが殊に鄙びて見えるといふのである。畫は其を媪と見て糸車をひく處を畫たのである。是等は振つたも

のとは覺えぬ。

春待や宿痾にたへて憂ふ事

久しい病氣に難んで臥せつてゐる、もう春が近いと其を唯心頼みにしてゐるやうな果敢ない境涯である、其病軀にも尙病を忘れて心配をしなければならぬ事があるといふのである。畫は其人を子規居士と見て書いたのである。不折氏曰。自分の前に出版した「俳畫法」の初めに子規居士と自分との俳畫論を掲げた。今此句が偶然余に居士の畫を作らしめて此「不折俳畫」の終末とする事が出来たのは満足するところであると。

終りに臨んで余は自己の病後とか子供の病中とかいふ理由以外に、此頃は俳句の解釋などいふ事に餘り興味を持たぬ身を以てして、ほんの義務としてかゝる事に携つた事を自分乍ら不満足に覺え且つ不、碧兩君に申譯が無いと思ふ。併せて讀者諸君にも寛恕を乞はねばならぬ。明治四十三年三月十一日記。

虚子

不俳排畫下卷評釋終

本書五絶の由來

昨春不折先生を訪ひし硯、俳畫の雅談簡古禪味饒なる清談を聽き、心動きしこと尠からざりし、よつて予が病後の閒ありしに乘じ、碧先生との合作を請ひ梨棗に鐫り、同好の士に贈りもし、又弘く發賣もしたりしが先きの俳畫法なり、然るにこは小冊子なりしにも拘はらず、世間の歡迎淺からず、四版の増刷を要求せし程の始末にて、道樂半分の事業が却て黒人まかせの結果とはなれり。

俳畫法發行の當時、不折先生、これに續きて碧君の四季四十句を選び、四十幀の俳畫を試みんかど約せられしが、前集すでに斯の如くなれば、爾來神澄み興湧く毎に揮灑頗る勉めらる、然れども、予の訪ひて稿本を請ふ毎に「君既に營利を離れて公行す、予又商賣氣を離れて構思百端稿を更ふることも何れも四五次に及べども未だ意に満たず、畫稿は斯の如し」と笥を傾けて稿本を示さる、予之を見ては強て請はん術無く空しく歸るを常としたりき、されども予の病も全く癒え、氣旺んに腕鳴りて抑止

し難かりしかば、今春に及びて、又頻りに車を飛ばせて脱稿を乞へとも先生愈塗抹改稿の益すのみにていつ果つべしとも思はれず、ある日予又先生を訪ひ巧遅ならざれば俳の眞意に反くにや、先生の俳畫の何ぞ遅き、願くは予をして畫稿中に就て選び取ることを許されんことをといふ、先生哄然大笑君の攻撃亦俳味あり、されども昨夜既に纏めたりとて一冊を取り出し與へらる。

予狂喜して尺璧もたゞならず直に辭して歸らんとすれば、先生止めていふ、漱虚二君に俳論及び評言を請ひおけり、往つて受けられよと、予益狂喜し履を倒にして歸りき。

稿本全く集るを見れば三先生の作物は既に天下の三絶也、予又尋常書估の後塵を追はず、彫刻印刷の雙絶を以て諸先生の好意に報ひざるを得ざるを知れり、即ち日々工人の家に臨み指揮監督して漸く茲に完成を告ぐ、讀者幸に本書の五絶の誇張ならざるを看取せられん事を希ふ。

明治四十三年三月

光華堂にて

中川知新識す

中村不折先生著及畫 河東碧梧桐先生俳句及書

第四版 俳畫法

和裝美本
木版奉書彩色刷
金七拾錢
郵稅金四錢

口繪寫真版刷 雪舟。芭蕉。蕪村。古淵。

俳畫十二ヶ月彩色刷不折畫 俳句碧子の書

○俳畫とは？

無聲の詩と短詩との調和せし幽玄高雅の美術品なり

○俳畫法とは？

本書を精讀せば俳人畫家は勿論誰人にも容易に描き得る妙法なり

○俳畫論とは？

不折先生が十數年前于規先生と研究し爾後研鑽と天才との秘訣を開放詳説し、崇高風雅の清樂を滿天下の雅君に公にする

本書は不折俳畫の前篇にして先生特得の俳畫十二葉及碧梧桐先生の筆になれる四季四十句を收め巻尾には俳畫論と題し畫風、畫法、題畫の實價運筆法等を親切に説明したれば俳畫の何ものなるかを知らんと欲する士は須らく一讀せざるべからざる良書にして一たび本書を繙けば妙味津々、風韻躍々として紙上に溢れ頗る興趣を感じしむ、斯道に遊ぶの士は必ず一本を備へざるべからざる珍書なり

好評噴々として忽ちにして絶版となり茲に第四版を發行す以て本書が如何に世に歡迎せられしかを知らむ

本書の上巻は春夏二十題三月十二日發行にして定價郵税は下巻と同じ

木版印刷 光華堂
活版印刷 東洋印刷株式會社

明治四十三年三月三十日 印刷
明治四十三年四月二日 發行



東京市下谷區中根岸町卅一番地 著作者 中村不折
東京市本郷區向ヶ岡彌生町三番地 發行者 堀 昌 次
東京市芝區愛宕町三丁目二番地 印刷者 中野 鉄 太郎

定價 金九拾錢
郵稅 金六錢

發行所 東京本郷區彌生町二番地 光華堂
接替口座東京四一〇〇番

賣捌所 東京市神田區 東京堂
表神保町三番地

東京本石町至誠堂 名古屋川瀬
大阪 吉岡 杉本 久留米菊竹

213
487

故帝室技藝員橋本雅邦翁筆 (第三回増刷出来)
雅邦帖
 正價金參圓八拾錢
 小包料内
 拾貳錢
 臺灣參拾四錢

綴子表金線折本美術畫帖日本獨得美術
 木版緻密極彩色雅邦紙印刷四季三十圖

- 目次
- 喬松雙鶴 春晴岳雪 狙公操縱 池上鴛鴦
 - 麗禽啄花 上巳清樂 名邊推敲 山紫水明
 - 白沙青松 奇峯摩天 水邊鶴鳴 浮家泛宅
 - 山高塔小 詩聖觀瀑 少女嬉戲 猛虎藏爪
 - 海氣滿樓 風伯鳴枝 一竿忘機 水亭落雁
 - 紅葉村莊 田家秋成 吻々呼類 樹下老村
 - 氣溫花香 穰々有年 月下擣衣 孤客晚歸
 - 寒江蘆雁 雪滿群山

帖中收ひる所の神品三十圖悉く是れ美神の權化彫刻は
 老手獨得の技巧に成て神韻筆意は勿論傳色暈染真物に
 異らず實に畫家笈中の秘冊紳士机上の愛玩なり

默風前田先生書

心經
 和裝大本白紙刷
 正價各金六拾錢
 郵稅各金四錢

楷書既刻發賣。隸書三月發行。
 行書四月發行。草書五月發行。

右楷書ハ古寫經體ニ依テ揮毫セラル字方正筆力勁健ニシテ利劍ノ如ク
 實ニ楷法ノ模範タル之ニ過ケルモノ非ルベシ又隸書ハ泰山經石刻ニ依リ
 書セラレタルヲ以テ字形飄灑筆勢溫健ニシテ野鶴ノ如ク楷道ノ骨ト韻ヲ
 ベキ乎而シテ各書トモ毎字一寸二分ニシテ印刷鮮明釘捲圖ナル等普通
 出版書ト同一視スベキモノニ非ズ御望ノ諸君ハ至急申込レベシ
 東京日々新聞批評 ○楷書心經。前田默風道人は現今書家中の傑
 ヲたるものなり、其得道助にして簡古、清雅にして醇朴なる吟らんと他
 匹儔を見ず、又道人の新道に熱心にして、或は講話に或は著述に其普及
 を圖らんとするは甚だ感ず可き次第と謂ふべし、而して今回刊行せし道
 人の書帖は益々老熟の域に進みし状を見る可く筆致の健剛中に一種の風韻
 を帯びたるは最も賞するに足れり、殊に此書は古寫經體に依りたる體
 なれど字形方正にして楷法の模範とす可く、隨て世の字格を饜るものと
 同一視す可からざるなり。

報知新聞記者中山丙子先生選

大家名畫集

定價貳圓五拾錢
 郵稅金八錢

和裝美木美術木版緻密極彩色奉書紙印刷插畫
 十九葉

- 挿畫目次
- 榮之 船遊
 - 又兵衛 ありのすまび
 - 淡菊 妻戀猫
 - 雪舟 羅漢
 - 華山 草花に猫
 - 政演 天明年間吉原所見
 - 應舉 京人形
 - 容齋 色即是空
 - 杉風 若衆姿(俳諧、風雪句)
 - 春草 茶店女
 - 蘇村 泰山拾得
 - 北齋 辰巳女
 - 抱一 草花
 - 信正 雙陸遊
 - 寛政 遊戯人物
 - 長春 のろま人形(其一、其二)
 - 海信 花見男
 - 天正前後堺湊浦居留地の圖

本書は本邦美術家を代表すべき大家中より特に傑出せしものを選び更に其精華を抜きしものにして殊に木版の精巧、印刷の鮮明彩美なるに到つては他に其比を見ず、巻尾には中山先生の流暢なる筆、趣味ある材料とを以て各畫人の傳記逸話及奇行を蒐めて數十頁を附したれば畫面以外に感興躍如として紙上に溢る、思ひあらむ 初版忽ち賣切再版を發行す

德富蘇峰先生序 中村不折先生口繪
 前田默風先生著書及書 高森碎巖先生繪

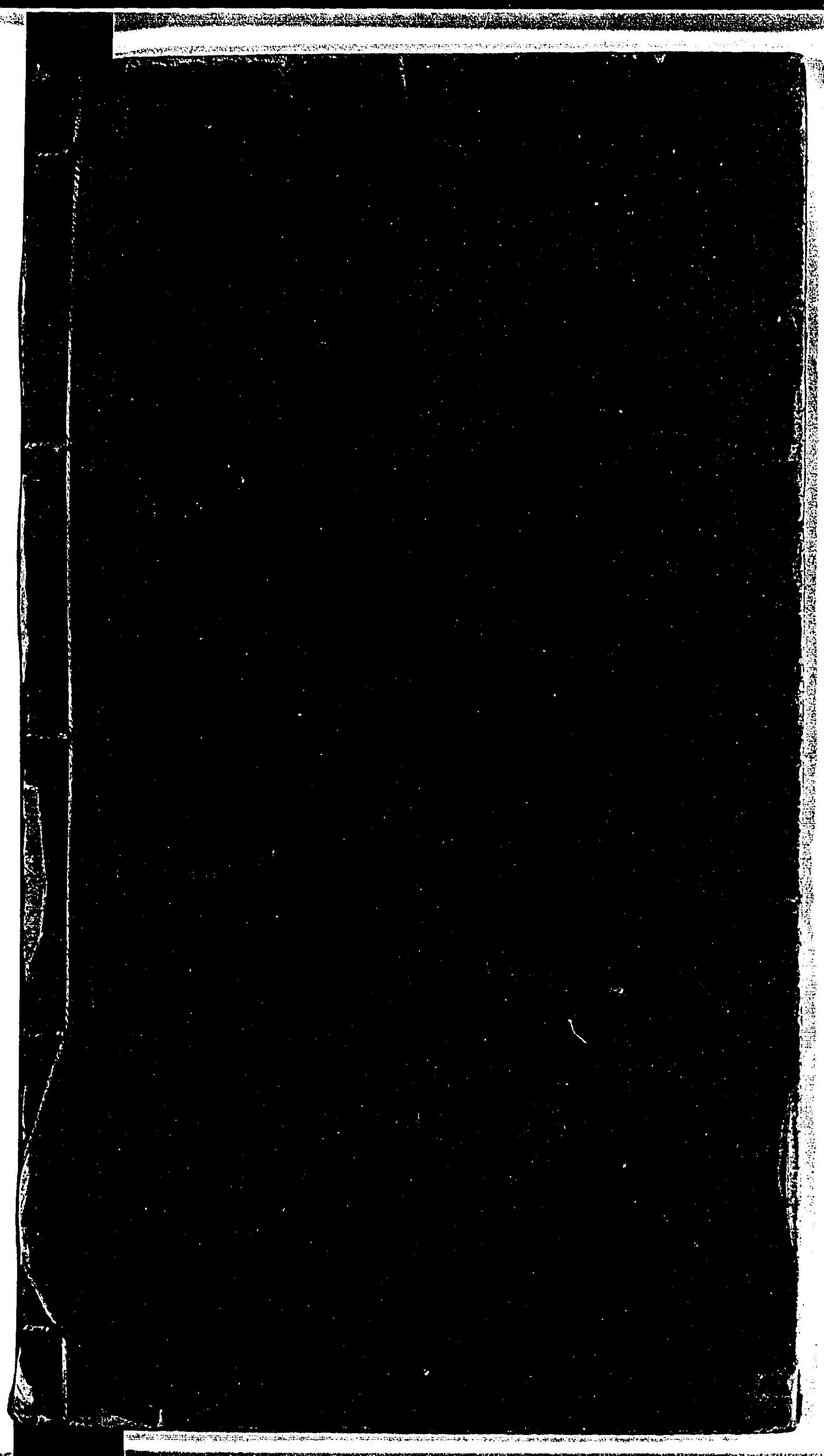
書畫研究會

上卷挿繪圖 九十餘圖(繪畫點畫圖及鋒筆)

本書は默風先生が畢生の蘊蓄を傾倒したる書畫速成の要訣を後進者の爲め世に出さんことを勸め茲に梓に上せしものにして、店頭臚列する蕪雜の書と軌を同うせず、一度本書を繕けば多數の繪畫及點畫圖につき親切丁寧に指導し殊に難解とする筆鋒、運用、秘事、秘傳の一切を開放詳解したれば容易に運筆の妙を會得すると同時に書畫の根本的原理の同一を了解し従て古人筆蹟の眞偽を鑒別する技能を得べく實に三千年間書畫道の要訣を茲に悉せり、書神手を執つて教へ畫聖紙に臨て教ふる如し實に空前の一大珍書なり

和裝大本 定價八拾五錢
 上卷(白紙) 三月下旬發行
 用紙(白紙) 三月下旬發行
 從九寸五分 三月下旬發行
 橫五寸五分 三月下旬發行
 唐本形に倣ふ 下旬發行

2/3
✓
487



213
487

070434-000-9

213-487

不折俳画

中村 不折/画

M43

CEC-1666

